

高校野球の全国大会の発生起源についての考察

——新聞社間の競争が促進剤になった——

玉 置 通 夫

Study of the Origin of the All Japan High-school Baseball Championships (1915) from the Viewpoint of Newspaper Competition

TAMAKI Michio

Abstract : This paper presents a study of the origin of the All Japan Baseball Championships, which were founded by the Asahi newspaper, one of Osaka's strongest newspapers, in 1915. Murayama Ryuhei, the president of Asahi Newspapers decided to start the tournament, although at the time baseball was not as popular a sport as it is today. Why did he take such a risk? This question is the focus of this study, the answer lying in the strength of two newspapers, Asahi and Mainichi.

1. はじめに

高校野球の全国大会が始まってから、2012年で97年になる。国内で1世紀近い歴史を刻んだ高校生のスポーツ大会¹⁾は稀有な存在であり、甲子園球場（兵庫県西宮市甲子園町1-82）を舞台に展開される春夏の大会は、風物詩として一般社会に強く認知されるまでになっている。スポーツ、なかでも野球に全く興味がなくても、「高校野球」の存在を全く知らない人は珍しいし、高校野球＝甲子園球場と結び付けて連想する人も多い。その意味では、甲子園球場における高校野球大会の存在は完全に定着している、と定義付けしても無理はないだろう。

このように、国民的行事とまで言われるようになった高校野球の全国大会だが、一体どのようにして始まったのだろうか。とくに知りたいのは、大会を始めるきっかけとなった直接的な動機だ。第1回大会が開催された1915（大正4）年は、学生の間では中等学校野球が人気を呼んでいたとは言っても、女学生にとっては一部に関心をもたれていた程度であり、学生以外の労働者や主婦までもが興味を持つような人気スポーツではなかった。このため、中等学校野球の大会を主催

することは暴虎馮河の誹りを免れない時代相であり、すんなりと大会開催に踏み切れるような情勢ではなかったはずだ。そのような悪条件の中で、あえて開催へのボタンを押したきっかけが何だったのか興味が尽きない。これまで、その経緯についての先行研究は意外にも少なく、全国高等学校野球選手権大会史²⁾などにも簡単に触れられているものの、主催者である朝日新聞社に都合の良い文脈が散見されるため、そのまま全てを信じるに足る1級資料とするわけには行かない。しかし、その他の価値ある資料は、ほとんどない状態であり、当事者たちの発言など限られた乏しい資料から類推せざるを得ないのが実情である。

2. 中等学校野球の変遷

アメリカの国技であるベースボールが、いつごろ、わが国に渡来したのかについては、諸説ある。大別すれば、米国人が持ち込んだ説と日本人留学生が持ち帰ったとの二つの意見に集約できる。米国人持込説は、1871（明治4）年に熊本市内の熊本洋学校でジェイムスなる米人教師が学生に野球を教えたという説から始まって、1872（同5）年に東京の第一大学区第一番中学（一番中＝後の第一高等学校）の学生に対し、教師

のウイルソンが野球を手ほどきした説、1873（同6）年に開成学校（後の東京大学）で米人教師のウイルソンらが生徒に野球を教えた説であり、持ち帰り説は1874（同7）年に米国留学から帰国した牧野伸顕が持ち帰って開成学校に伝えたと言説が有力である。

しかし、これらの諸説を吟味してみると、明治4年説は熊本日日新聞が編集した「熊本の体力・郷土スポーツの歩み」³⁾や雑誌「運動界」に紹介されているもの⁴⁾だが、確かな根拠は示されておらず、「進化と保守の両極端を有する熊本人から考えて、そんな可能性も排除できない」という程度の説に過ぎない。明治4年の段階で、ジェイムスが本当にボールやバットを持参していたのかも全く不明である。また、明治6年説は野球評論家の橋戸信が著した「日本野球史」にあるものだが、学生に野球を手ほどきしたという人物が来日外国人名簿に記載されていない⁵⁾など史実に反する記述があり、野球の渡来起源に関する限りは、信用できない。明治7年説は評論家の木村毅による「日本スポーツ文化史」や広瀬謙三の「野球起源説私見」にあるもので、野球の伝来は米国人が齎したのではなく、日本人の留学帰国者が持ち帰ったとの立場に依拠しているが、牧野が帰国して開成学校に入学するのは明治8年である点からも、7年説は根拠が薄弱である。

このように、野球の渡来に関しては諸意見が披瀝されているが、現在では、ほぼ米国人による持込説が決定的になっている。そのなかでも、最も説得力があり、定説的な位置づけをされているのが、明治5年説である。野球好きで知られる正岡子規が日本新聞の随筆⁶⁾で「詳らかに知らぬが、（野球の渡来は）明治14、5年ころだろう」と書いたところ、匿名で「明治5年、自分が一番中の生徒だった際、ウイルソンという米人教師に野球を教わった」との投書があり⁷⁾、具体的な内容であることから、投書の信憑性が高く、子規も自らの謝りを認めて明治5年説を支持した⁸⁾。「日本野球創世記」の著者である君島一郎も、明治5年説を採り、以後、有力説となって今日に至っている。しかし、これ以上の有力な資料はなく、さらに定説を補強する材料発掘が待たれているのが実情だ。

いずれにしても、明治維新の興奮冷めやらぬ時代に、野球は、国内に一気に流入した欧米の学問や文化、風俗とともに、米人の教師や宣教師などによって齎され、開校間もない各種の学校に取り入れられ、普及していったと考えるのが自然の流れだ。

国内で最初に盛んになったのは、米国人が多かった国立の中学校や私立のミッションスクールだった。と

くに、明治20年代までに、第一高等学校（一高）や第三高等学校（三高）などの旧制高等学校、青山学院や明治学院、学習院、慶應、同志社で野球が盛んになり⁹⁾、これらの学校の生徒たちが夏休みに母校の中学校で後輩たちに野球を教えることによって、明治30年代後半には全国の中学校にも野球が伝播し、浸透して行った。また、このころになると、大学でも、早稲田や関西学院、桃山学院でも野球部が創設¹⁰⁾されて力を蓄え、一高や三高に替わって早稲田と慶應が台頭して米国遠征まで行なうようになり、完全に勢力図を書き換えた。このような背景の中で、明治末には、各地で中学校の試合が行なわれるようになり、大正に入ると、一部の好球家の間から、全国大会を求める声さえ上がるようになった。

3. 全国大会への摸索

これが、全国大会が始まる直前の時代相である。そして、大正になってから、全国大会がスタートする1915（大正4）年までの4年間に、どんな出来事があったのか。その情况分析こそが、「如何にして高校野球の大会は始まったのか」と言うテーマの研究になるわけだが、不十分な資料しか残っていないだけに、困難な作業を強いられるのはやむをえない。それでも、ある程度の推理力で補いながら、深層に迫る努力は大切であるし、それなくしては、原点の研究は成り立たない。

最初のキーポイントは、三高が主催する中学校を対象とした野球の三高大会の援助問題だ。三高大会は、正式には「近県連合野球大会」と称し、1901（明治34）年から毎年京都市の三高グラウンドで行なわれていた。近畿以外の東海や四国も含む20校以上が参加する大規模なブロック大会であり、各校の力量を知るためには格好の場として有名だった。しかし、三高大会も回を重ねるごとに盛況となり、運営資金が逼迫して単独開催も限界に達していた。そこで、1914（大正3）年に、大阪毎日新聞（大毎＝現毎日新聞大阪本社）と大阪朝日新聞（朝日）に救済を求めた。このときの両紙の対応は、ほぼ同じで、あっさりと申し出を断っている。その理由については、大毎が「主催している関西中学校庭球選手権大会が盛況であり、野球まで手が回らない」との趣旨だったことが分かっている¹¹⁾が、朝日は判然としていない。大会40年史によると、村山龍平社長は聞く耳を持たないような態度だった、と伝えている。考えられることは、村山社長は野球の

知識がなく、興味も持っていなかったから、海のものとも山のものとも分からない中等学校野球に肩入れできなかったのではないかな。さらに、3年前の1915（明治44）年に東京朝日が展開した反野球キャンペーンも、ひっかかる要因だろう。万一、大正3年の段階で全国大会の開催を決めていれば、大阪は記事を掲載していないといっても、同じ朝日でもあり、詭弁になってしまう。野球を批判した舌の根も乾かないうちに、野球事業に参入することには、さすがに抵抗があった、とみるのが妥当ではないか。具体的な資料はないものの、十分に検証さるべき問題である。

次に問題となるのは、けんもほろろに断ったのに翌1915年にあっさり三高大会への応援を承諾した朝日の豹変ぶりだ。大毎は15年も庭球大会を理由に断った模様¹²⁾であるが、朝日は一転して、援助を約束している。村山社長になんらかの心境の変化があった、と見るべきだろう。それは、どんなことなのか。全国の強豪チームを集めて対戦させる企画は、野球好きの間で自然に起こってきただろうし、村山も野球なるものに関心を高めていた、との大会40年史の証言もある。しかし、決定的要素は、ライバルの大毎の動向だったのではないだろうか。三高が大毎にも声をかけていることは、分かっていたはずだ。しかし、大毎は動かない。それならばこちらから行動しても良いかもしれない、と考えても不思議ではない。ともかく、三高大会ぐらいならば主催しても大きなリスクにはならない、との思惑は十分に察知できる。

いずれにしても、中等学校野球は盛んになってきたものの、一般的には、まだまだ野球熱といえるほどの熱風は吹いていなかった。このため、全国大会を事業として展開するには、時期尚早だった。大毎が庭球大会を理由に三高大会への援助を拒否したのも、同じ心情だったと推察できる。野球に関心のある人は、まだ少なく、もう少し様子を見てからでも良いのではないかな、というのが、大毎と朝日に共通した心情でもあった、と解釈したほうが分かりやすいはずだ。野球ファンで親交のある中沢良夫（京都大学教授）¹³⁾から、直接面談して全国大会の創設を訴えられても、村山が動かなかったのも、そんな計算があったからではないかな。

4. 大毎にも話をしたのか

もう一つのポイントは、全国大会開催への火付け役になった豊中運動場を所有する箕面有馬電気鉄道（箕

有鉄道＝現在の阪急電鉄）からの誘いだ。豊中運動場は1913（大正2）年に完成した陸上競技場で、その年10月には日本オリンピック大会¹⁴⁾と称した陸上競技の全国大会が行なわれたほか、正方形の400メートルのトラックの内側にあるフィールド部分を利用して日米学生野球などもあったものの、通年の施設稼働率が低く、なにか大きなスポーツイベントを摸索していたのだ。朝日の本社を訪れた運動場担当の吉岡重三郎¹⁵⁾に対し、社会部の運動担当だった田村木国¹⁶⁾は「中等学校野球の全国的な大会を開催したら面白いのではないかな」と提案した。吉岡は、その話に飛びつき、「ぜひ計画して欲しい」と要請した。

しかし、ここで田村は、吉岡の行動に違和感を持った、と大会40年史は記している。その理由として、箕有鉄道の大阪事務所から朝日本社への経路の途中に大毎があるため、吉岡は大毎にも寄って同様の要請をしてきた可能性が高いと読んだのだ。当時、大毎と朝日は部数が拮抗し、激しい部数獲得競争を展開していたことを考慮すれば、田村が推理したもの、むしろ当然かもしれない。もっと敷衍すれば、豊中運動場は大毎からの要請に応えた箕有鉄道が建設したものであり、同鉄道の専務で実力者だった小林一三は慶應義塾の出身で、大毎の高木利太（営業局長）や奥村信太郎（社会部長）、高石真五郎（外信部長）といった幹部も同窓だったことから、両者の間には縁があった¹⁷⁾。そんなことを考慮すれば、大毎にも相談に行った可能性は十分にある。これだけ状況証拠が揃えば、この田村の推理は順当な範疇に入るものだ。

しかし、残念なことに、田村の推理について、正当化するだけの資料は残っていない。大毎には吉岡からの要請を匂わす資料がなく、「前年同様、色よい返事はなかった」との関係者の証言¹⁸⁾があるだけだ。大会40年史に掲載されている田村の回想だけが、活字化されて、全国大会誕生への伏線を匂わす役割を演じている。それでも、本当に吉岡が大毎にも話を持ちかけているとすれば、いつ大毎に行ったのか。朝日に来る前に寄ったのか、それとも違う日に大毎だけに話をしたのか、大毎はどのような返事をしたのか、明確な意思表示をしなかったのか、などの点が気になるところである。真相解明には、価値の高い一次資料の発掘が待たれるところだ。

5. 村山の豹変

結局、この吉岡による要請が、朝日による中等学校

野球の全国大会の誕生への呼び水となった。吉岡からの要請を受けた田村は、早速、上司の長谷川如是閑（社会部長）¹⁹⁾に話の趣旨を伝え、さらに、村山社長にも上申された。その結果、あっさりと村山は、大会創設を決断した。大会40年史によると、「すぐに決断した。時間にして30分ぐらいだった」ということらしい。しかし、ここで新たな疑問が湧く。前年、大会創設をけんもほろろに断った村山が、なぜ豹変したのか。40年史には、「この1年間、村山が野球を勉強し、興味を覚えた。青少年の体力作りには野球が最適だとの結論に達したため、大会創設に舵を切った」との趣旨が書かれているが、これは、後付けの可能性が高い。余りにも辻褄が合いすぎており、こんなきれいごとでは説得力が弱い。もっと、現世的な要因があっても、おかしくないはずだ。

村山を「即断」に走らせたものは、何だったのだろうか。これが、最も大きなポイントになる。この謎解きをするためには、田村-長谷川とリレーされた「吉岡からの提案と田村のアイデア」を分析してみる必要がある。まず分かるのは、吉岡の提案は決して突飛なものではない、ということだ。運動場の稼働率を高めるためのイベントが必要であるのは、ごく当然のものだ。それでは、田村の提案と社内的な上申は、どうだろうか。田村の提案は、三高大会の関係者も口にしていたことであり、目新しいものではない。野球好きの京大教授・中野良夫も、村山に直談判しているほどだ。このように、要因になりそうなものを消去法で削って行くと、最後に田村の社内上申が残る。田村は、どのようにして長谷川に意見具申したのだろうか。もちろん中学校野球の全国大会の必要性を説いたはずだが、果たして、これだけで長谷川を動かすことができたのだろうか、との疑念が湧く。前年からの流れなどから見て、長谷川が中学校野球に特別な関心を持っていたとは考えられない。むしろ、無関心だったといっても良いくらいだろう。

そこで考えられるのが、田村が抱いた大毎との関係だ。朝日にとって、大毎の動きは気にならないほうが可笑的。ところが、大毎は中学校野球絡みの話に対し、全く動きを見せていない。事実、大毎は中学校野球に対して、「関心がないわけでもないが、今すぐにやらなければならない緊急性のあるスポーツ事業ではない」と捉えていたのではない。勿論、決定的な資料があるわけではない。しかし、推論を重ねてゆくと、このような方向性を持っていたことに、蓋然性が十分にある。しかし、朝日からすれば、大毎が不気

味な存在として位置付けられたのは、まず間違いないところだ。野球に関しては二の足を踏んでいるようだが、すでにテニス大会を成功させており、決して中等学校のスポーツ事業に関心がないわけではない、と類推できるはずだ。それならば、このまま放置しておくで大毎が野球に興味を持つ可能性も高い。野球の全国大会ともなると、出場校をどのように選ぶのかといった問題から始まり、各校の旅費や滞在費など、運営には問題が多い。粗末な運動場しかない状態で、観客数も予想できず、事業としては、はなはだ危険性の高いものであったのは、確かだ。しかし、そのようなリスクを犯しても、主催事業に踏み切ったのは、「大毎にも話をしているらしい」という田村の補足説明が、必要以上に増幅されて上申され、その意を付度した、記者上がりではない村山の持つ経営者独特の感覚だった、と推論できる。大毎が様子見をしているうちに一気に勝負に出た、と解釈した方が辻褄が合う。それが、「わずか30分での決着」の実態とみてよいだろう。

つまり、中学校野球の全国大会は、朝日と大毎両紙による熾烈な部数競争が発火点になった事業である。国民に対する輿論喚起という命題を背負っているとはいえ、新聞社も企業であることに変わりはない。特に事業は、公共の福祉的な視点が不可欠ではあるが、余りにも不採算が見込まれる場合には、事業計画を中止せざるを得なくなるのは、当然のことである。当時の情勢に当て嵌めてみると、中学校野球は新興の競技であり、現在の高校野球のように広く認知されたものではなかった。おそらく、事業として主催するには時期尚早とみるのが、一般的な判断だったはずだ。そんな危険性に、あえて挑戦したのは、再度強調することになるが、大毎を強く意識した村山の経営者としてのセンスが光った決断だった、と見るべきではないかと考えざるを得ない。

6. 朝日社内の不統一と大毎紙面

主催事業として中学校野球の全国大会開催が決まった後、朝日の東西本社への対応は、好対照だった。つまり、大阪本社が決めた事業に対し、東京本社が非協力的態度を取ったのだ。新聞社に限らず、東西に本支店を置く企業では、対立は珍しいことではないが、このときの朝日の対立は酷いものだった。東京朝日は、大阪紙面が4日連続で掲載した大会の開催社告²⁰⁾を掲載せず、試合の模様を伝える記事も全くのおごなりで、どこに記事があるのか探すのに手間取るほどだっ

た。明らかに大阪の決定に対して非協力を決め込んでおり、同じ社でありながら、これほどの差がある例も珍しい。さすがに、翌年からは開催を告知する社告も掲載され、紙面的にも多少は改善されたものの、まだまだ「嫌々付き合っている」感じで、現在のような紙面展開はまさに隔世の感といわざるを得ない。

それでは、朝日に中等学校野球事業に踏み込まずきっかけを作ったライバルの大毎は、どんな対応をしたのだろうか。一般的に考えれば、少なくとも紙面的には無視、または冷たい扱いにすることだってありえるはずだ。先手を取られた、との思惑も否定しがたいところだろう。ところが、紙面的には、朝日とさほどの遜色を感じられないくらい積極的に扱っている。さすがに事前記事こそないものの、大会初日は結構良い扱いをしている。「大阪朝日主催」と明記しており、試合の写真も有るし、戦評は朝日より丁寧だ。開会式も手厚く、史上有名な村山社長の始球式写真も、少し角度は異なるものの、掲載されている。これは、いったい何を意味しているのか。結論から言えば、大毎も、中等学校野球には関心が高かった、ということになる。また見方を変えて読者本意の目線で言えば、関心の高いニュースはきちんと扱うべきである、との原則に則った記事であるともいえる。意外に大きな扱いの真意は、全く不明だが、中等学校野球に対する読者の関心の高さが背景にあることだけは確かだ。事実、紙面的には、野球全般の記事が目立つようになり、1917（大正6）年には、朝日に先駆けて社会部内に運動課を設置²¹⁾したほどだ。

また、大毎は朝日の大会が始まってから9年後の1924（大正13）年、選抜中等学校野球（現選抜高校野球）を開催する。社史²²⁾は「大朝（筆者注－現朝日新聞大阪本社）に遅れをとったことでライバル意識をさらにかりたてられた」と記しており、当初から野球事業に全く関心がなかった訳ではないことを裏づけている。

いずれにしても、朝日、大毎両新聞社のライバル争いが原動力となって、中等学校野球が隆盛を極めるようになったのは、ここまでの考察からも明らかである。明治時代になってジャーナリズムとの邂逅によってスポーツは普及、浸透してきた。とくに、強く影響を受けた競技が野球であることには、異論がないだろう。なかでも、高校野球は、中等学校野球という前史が大きな役割を果たしており、その全国大会が大規模な大会になったからこそ国民に広く浸透することが出来たわけであるし、中等学校野球人気の過熱が甲子園

球場を生んだのも、その伏線になっていることだけは、まちがいない。

注

- 1) 全国高校ラグビー選手権、サッカー選手権は1918（大正7）年に同一大会として始まり、戦後の1966（昭和41）年から両大会に分離。野球に次ぐ歴史を誇る。
- 2) 朝日新聞社刊で、大会40年史、50年史、70年史がある。
- 3) 1967（昭和42）年刊。
- 4) 1925（大正14）年5月号に掲載。
- 5) 野球を指導した教師としてウイルソンとマジエットの2人をあげているが、マジエットは明治8年から在職しており、明治6年説とは不適合。また、マジエットなる人物は来日外国人名簿には記されていないとの説もあり、いずれにしても明治6年説の根拠にしにくい。
- 6) 三宅雪嶺主宰の新聞「日本」の1896（明治29）年7月19日、23日、27日紙面。
- 7) 1896年7月23日、「日本」紙上に「好球生投」の署名で掲載。この人の正体は不明のまま。
- 8) 1996年7月
- 9) 東京英和学校（現青山学院）が1883（明治16）年、明治学院は1885（同18）年、慶應1888（同21）年、同志社と学習院は1889（同22）年に創部。
- 10) 関西学院が1899（同32）年、早稲田1901（同34）年に創部した。桃山学院は1903（明治36）年に中学校を開設したが、1890（明治23）年設立の神学校時代から野球をやっていたとの説がある。
- 11) 1983（昭和58）年9月19日、小西作太郎氏（元朝日新聞大阪本社代表、三高大会の窮状打開のため活動した生き証人）への取材。
- 12) 同上
- 13) 戦後の1948（昭和23）年の学制改革に伴い発足した日本高等学校野球連盟の初代会長を務めた。
- 14) 大阪毎日新聞が主宰した陸上競技界初の全国大会で、当時の国内トップ選手が参加した。この1ヶ月後に東京・戸塚陸上競技場で第1回日本選手権が開催された。
- 15) 後に東宝社長。
- 16) 木国は俳号で、本名は省三。後に大毎に移籍した。
- 17) 大毎と阪急電鉄は各種催事で関係が深く、1935（昭和10）年、プロ野球チームを結成する際、小林一三社長が大毎に相談するように指示した日記が「阪急グループ50年史」（1987年刊）に掲載されている。
- 18) 前掲小西作太郎氏の証言。
- 19) 本名は長谷川萬次郎。論説委員としても健筆を揮い、1918（大正7）年の米騒動後の言論弾圧事件で退社し、評論家生活を続けた。
- 20) 1915（大正4）年7月1日から4日まで。
- 21) 大阪朝日は1919（大正8）年に設置。大毎の独立した運動課は1922年、朝日は1923年に創られた。
- 22) 「毎日の3世紀－新聞が見つめた激流130年」（2002年毎日新聞社刊）650ページ。